

# 平和新聞

16



作成・編集者

## あの日、広島で起った事

7月31日、千葉市中央区の千  
アアラサ千葉で、講座、今しが開け  
ない、被爆体験者を取材が聞  
催され、八千代市原爆被爆者の会  
の中村絃さん、小谷孝子さんから、  
平和と命の大切さについてお話を伺った。

◇◇◇◇◇

1945年8月6日、広島市に原爆が  
か投下された。数千度の熱線と  
35万トンもの高圧爆風は、瞬にして  
14万人の命を奪った。大々傷を負った  
人々も、水を求めてさまよひ、歩きながら  
倒れてゆく。まるで地獄のような光景  
に、空は黒く、放射線による後遺  
症は世代を超えて引き継がれ、差  
別や健康を大切が人々を失った喪失  
感はその後何十年にも渡り、  
人々を苦しめ続けてきた。

## それでも、語る理由

全力で引、張、たが救い、出せない。周りから  
どか人に飲まれていく中、大好きなお母さん  
か言った。「逃げて、生き残って。」  
もし、自分と同じ立場だったから、  
どうした、どうするか。母のそばを離れず、  
命を同くするか、それとも母の命を大  
事にしてくれ、との言葉に、従い、その場を  
離れるか。「あの時母と一緒に死んで、た  
ほうか良かったんじゃないか？」とひろし君  
の問いかけは、何十年も繰り返さ  
れた。

被爆の体験があっても、実際にそれを  
語る人は多くない。語れないのだ。  
しかし、それでも立ち上がる人が居  
る。被爆当時、歳だ、た小谷さんは辛  
い過去から逃れるように上京し、幼稚園  
教師となった。子ども達の心を聞き、  
腹話術を学んでいった時、師匠に、  
被爆を体験したのだから、こ  
そ語りなさい、と勧められた。  
時間はかかるが、人形の扱われ、人  
たよ、中村さんの言葉が心に残った。